「伝えたいもの」

羽生結弦選手は、小学校の卒業アルバムでこんなことをつづっている。

「瞬間」

ぼくがこの６年間で１番心に残ったことはスケートのことです。楽しかったこと、くやしかったことなどいろいろ学びました。

ぼくがスケートを始めてから５年がたった４年の時、初めて全日本へすいせんされました。初めて出場する全日本、ぼくは、きんちょうよりも、ワクワクしていました。「絶対に優勝してやる」と思いながら、いつもよりも練習に励みました。

そして当日。ぼくの出番は何と一番。クラブの皆に「一番は大変だよ。でもがんばってね」と言われると、「一番は得意だから大丈夫」と言って、皆の、そして自分のきんちょうもほぐしました。

「一番、羽生結弦君」という合図と一緒にぼくの演技は始まりました。ぼくは何も考えずに無我夢中になって精一杯自分の演技をしました。ふっと気づいたら最後のポーズを終えた瞬間、大勢の観客から大きなはく手をもらいました。あの瞬間はいまだ忘れてはいません。とてもうれしかったです。そして、「観客に感謝したい」と初めて思いました。

ぼくはこの大会で「観客に感謝したい」という気持ちを学びました。これからもスケートを続けていろいろなことを学んでいきたいです。

２０１１年３月１１日、高校２年生の羽生選手は仙台市内のスケートリンクで練習中だった。リンクの氷がひび割れ、壁が崩れるのを見て、スケート靴のまま外に逃げた。仙台市内の自宅は全壊し、避難所で４日間を過ごした。

スケートリンクは被災して使えず、練習場所を失い、羽生選手は、全国のスケートリンクを転々とすることになった。多くの人たちが、羽生選手を気にかけ、声をかけてくれたり、練習場所の確保に動いてくれたりした。神戸などでのアイススケートショーにも参加した。しかし、その間も「こんなときにスケートをやっていいのだろうか」と自問自答する日々が続いたという。

震災から２年後の１９歳のとき、羽生選手は、ソチ冬季五輪に出場することになる。

羽生選手は、スケートリンクに入る前に、いつもリンクの氷に手で触れ、頭を下げてから、氷上に飛び出していく。演技が終わった後も氷に手を触れることを欠かさない。

その姿には、どんな意味があるのだろう。

ソチ冬季五輪のときも、同じ光景が見られた。そんな羽生選手が金メダルを取った瞬間、日本中が喜びに沸いた。

仙台のパレードでは、９万２千人の大観衆が集まり、羽生選手の金メダル獲得を喜んだ。

４年後の平昌冬季五輪でも金メダルを獲得し、２大会連続でのオリンピック金メダリストとなった。今も、自分自身が納得のできる、見ている人に勇気を伝えられる演技を目指して、スケートに真剣に向き合い、プロスケーターとして、練習に打ち込んでいる。